

一部明治期に下る可能性がある。

以上のように見張所改築区域では遺構は検出されず、また付帯工事に伴って掘削した箇所においても遺構は検出されなかった。よって、工事は予定通り施工した。

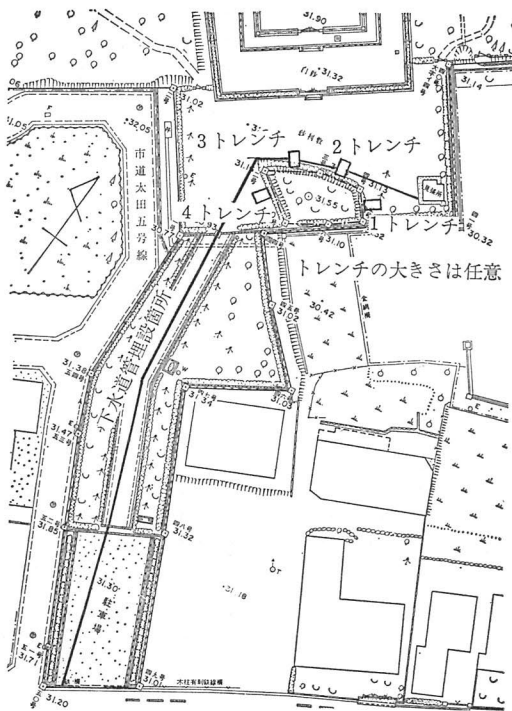
(徳田誠志)

### 三嶋藍野陵見張所下水道管理設箇所の立会調査

継体天皇三嶋藍野陵は、北摂を代表する前方後円墳である。今回の立会調査は、陵前を通る市道に下水道本管が整備され、この本管と拜所の一面にある見張所を結ぶ新しい下水道管が埋設されることに伴って実施したものである。調査は平成八年九月一日から四日間実施した。

調査は域内陪冢車塚に接する箇所に四本のトレンチ(二メートル×一米ートル)を設けて掘削した(第33図)。この部分に重点的にトレンチを設けた理由は、車塚が古代高塚式の陪冢であれば、その遺構、遺物の出土が予想されたためである。また、市道に至るまでの参道部分の掘削にあたっては、随時立会調査を行った。

1トレンチから順に掘削箇所の概要を記述していく。1、2トレンチは車塚の北側に設定した。掘削の結果両トレンチの土層断面の状況は極めて類似していた。すなわち、数センチの白砂層の下に八〇センチほどの厚さに暗黄褐色土(I層)が堆積していた。この層は途中締め具合によって上下に分層できるが、土質は全く同じものである。その下に厚



第33図 三嶋藍野陵調査箇所の位置(1/1000)

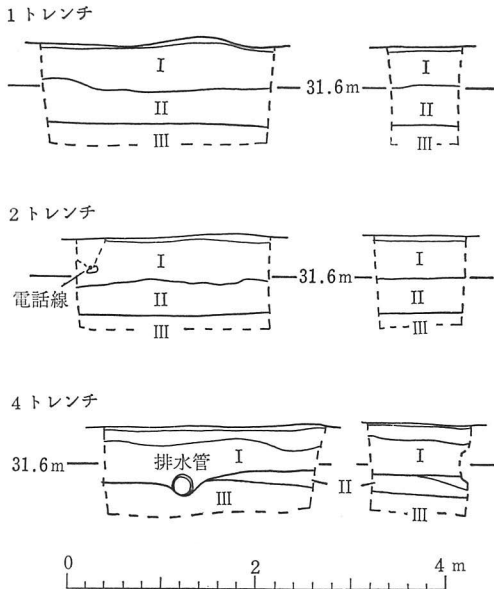
さ二〇センチほどの灰色粘質土(II層)がある。さらにその下は黄褐色礫混り土(III層)が観察された(第34図)。このIII層は非常に固く締まった土層であり、地山であると判断した。

このI層、II層の性格としては、I層は締め具のない土質から見て盛土であることは疑いがない。また、その土質が基本的には地山の土質と同じものであることから、近くの地山を掘削して盛土とした可能性が高い。一方II層は、旧水田の耕作土及び床土であると判断した。また、この高さから湧水があった。

3トレンチでは、表土下六〇センチほどの所に土管が埋設しており、

掘削中にその土管を破損し、トレンチが水没したことから調査は写真撮影のみに留めた。土層を観察したところその堆積状況は、1、2トレンチと同様であった。土管はI層内に埋設されていたものであるが、その用途が何を排水するために設けられているものかは不明である。この土管は車塚の方へ延びていることが確認できたものの、隣接地との境界線沿いには、この土管から延びるであろう排水管は確認できない。

4トレンチは車塚の西側に設定した。このトレンチでも表土下六〇センチほどの所に土管が埋設されていた。3トレンチで検出された土管とは径も異なり、方向も異なることから別のものと判断できる。ただし、この土管の用途及び排水先も不明である。このトレンチの土層も基本的



第34図 三嶋藍野陵調査箇所断面(1/80)

に1、2トレンチと同様であるが、地山がやや高いところで検出された。なお、このトレンチから燻瓦片、磁器の小破片が出土した。出土した層位はI層内の盛土である。これらの遺物の所屬時期は不明であるが、少なくとも近世以降のものであることは確かであろう。

以上の調査結果をまとめると、今回掘削した範囲はすべて盛土が厚く堆積していることがわかる。この盛土は当陵の拜所を整備した際に（大正十五年）なされた可能性が高いと思われる。今回観察された層序は、昭和五十九年に実施された見張所改修工事に伴う立会調査の所見と同様である（本誌第三七号参照 昭和六十一年二月刊）。

また、車塚に関する遺構は全く検出されなかった。車塚の現状は現在の拜所から五〇センチほど盛り上がった状況を呈している。しかしながら、今回の掘削箇所から、一切の遺構も検出されず、また埴輪の一点も出土しないことから、この陪冢が古代高塚式である可能性は低いように思われる。このことは、3トレンチで検出された土管が車塚方面へ延びていることと、隣接地を茨木市教育委員会が調査した際にも、古代高塚式らしい徴候が得られていないことから傍証できる。

なお、参道から駐車場にかけての掘削の際（平成八年十月二日～十八日）には、監区職員が立会調査を行った。その結果、市道に至るまで土層の状況は1、2トレンチと同様の状況であり、遺構、遺物は出土しなかった。

以上の調査所見から、工事は予定通り施工した。

（徳田誠志）